ナイジェリア連邦共和国話題集

ナイジェリアは、西アフリカ沿岸部に位置する連邦共和制国家。北にニジェール、東にカメルーン、西にベナンと国境を接し、南はギニア湾に面している。アフリカ最大の人口と経済規模を有する大国。言語、風習を異にする２５０以上の民族が存在すると言われるが、多数が三大民族と呼ばれるハウサ族（北部）、イボ族（南東部）、ヨルバ族（南西部）に属している。宗教はおよそ半分がイスラム教徒（北部）、もう半分がキリスト教徒（南部）に分かれている。南部を中心に伝統信仰も盛ん。国内の複雑な民族・社会情勢もあり、施政者は各民族・地域・宗教間のバランスを取ることに最大の労力を費やしている。

基礎情報

・面積：92.4 万平方キロメートル
　　（日本の約 2.5 倍）
・人口：2 億 614 万人（2022 年）
・首都：アブジャ
・言語：英語（公用語）、各民族語

国旗

国旗は、緑色が森林と天然資源、白は平和と統一を象徴している。

国名

ナイジェリアの国名は、同国を流れるニジェール川のほとりを意味すると言われる。

ナイジェリア略史

１　起源

紀元前５００年前、国土中央部のジョス高原において土偶で知られる初期鉄器文化であるノク文化が繁栄。ノク文化は土偶が最初に発見されたノク村にちなんで名付けられた。９世紀頃には、南東部ナイジャー・デルタにあるイボ・ウクゥ地域で指導者のいない集落網が形成された。１０世紀頃に南西部で、ヨルバ人の農民たちによってイフェに最初の町が作られ城壁で囲まれるようになり、その後王国となり栄えていった。１５世紀から１９世紀には交易により南部のベニン王国が黄金期を迎え、ベニン・ブロンズと呼ばれる彫像が芸術家たちによってつくられた。

ノク文化の彫像

ベニン王国（想像図）

ベニン王国の所在地

２　イスラム教の到来

北部では、１１世紀頃になると商人のハウサ人及び牧畜民のフラニ人の町ができ、１４世紀頃に首長の支配する町（カノ、カツィナなど）が都市国家として独立をした。交易によってイスラム教が北アフリカからもたらされ、１９世紀にイスラム聖職者ウスマン・ダン・フォディオがハウサ諸国を統一しソコト帝国を建国。西アフリカで最大の領土を持つようになり、イスラム教も広大な地域に広まっていった。

ウスマン・ダン・フォディオ

３　植民地化

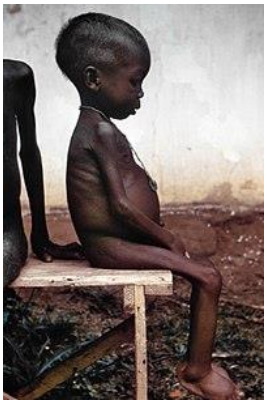
１５世紀にポルトガル人が奴隷貿易の拠点とするため沿岸部にラゴスを建設したことで、ナイジェリアの植民地化が始まる。１７世紀になるとイギリスを含むヨーロッパ諸国は、新大陸等開拓のため奴隷を大量に購入し、西インド諸島や南北アメリカに運んだ。奴隷貿易は、１８３４年に英国で奴隷制度が廃止されるまで続いた。

ポルトガルの貿易商らを迎える
ベニン王国の王

１８８６年、英国政府はジョージ・トーブマン・ゴールディ郷らによる貿易会社を「王立ナイジャー会社」として諸特権を与えた。これを機に、英国によるナイジェリア一帯の支配が開始され、１９世紀末から２０世紀初頭にかけて、ベニン王国やソコト帝国等が滅ぼされ、１９１４年に英領植民地ナイジェリアが形成された。その後、第二次世界大戦終結とともに英国からの独立運動が沸き起こり、１９６０年１０月１日に独立を果たした。

４　ビアフラ戦争（１９６７－１９７０）

１９６７年、石油埋蔵量の豊富な南東部で、イボ人のオジュク（Emeka Odumegwu Ojukwu）将軍がビアフラ共和国の独立を宣言し、ビアフラ戦争が始まった。ナイジェリア連邦政府軍との戦闘の中で、イスラム教徒が多い北部では数千人のイボ人が虐殺に遭ったとされる。戦争は１９７０年１月にビアフラ側が無条件降伏して終結した。包囲されたビアフラでは、食料・物資の供給が遮断され、１００万人以上が飢えなどで亡くなったとされ、やせ細った子どもたちの写真が世界中の新聞に掲載された。



ビアフラ戦争当時、栄養失調のためお腹の膨らんだ子ども

ナイジェリアのスポーツ

サッカー

スーパーイーグルス

ナイジェリアのナショナル・チーム（通称「スーパーイーグルス」）はアフリカ屈指の強豪として知られ、アトランタ五輪で金メダル、北京五輪で銀メダルを獲得している。２０１６年のリオデジャネイロ五輪では、グループリーグで日本代表との激闘を演じ（飛行機のトラブルで現地入りが当日になるも、ナイジェリアが日本に５－４で勝利）、その勢いのまま最終的に銅メダルを獲得。２０１４年のW杯ブラジル大会ではベスト１６に入ったが、２０１８年のW杯ロシア大会ではグループリーグ敗退。他方、２０１８年W杯のナイジェリア代表ユニフォームは、英国の大手メディア関連企業を含む様々なメディアで人気投票１位となり、国際的な男性ファッション誌ＧＱでもトップに選ばれるなど、ＳＮＳでも話題となった。英国プレミアリーグのチェルシーＦＣで活躍したミケル・ジョン・オビやヴィクター・モーゼスなどを筆頭に、世界的に知名度の高い選手も多い。首都アブジャで行われた２０２２年W杯予選では、ナイジェリアと共にアフリカを代表する強豪国であるガーナと接戦の末に１－１で引き分けたが、アウェーゴールルールによってガーナが勝者とされたため、惜しくもナイジェリアはW杯への出場権を逃した。

ファッション誌ＧＱで取り上げられた
２０１８年W杯
ナイジェリア代表ユニフォーム

東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会

東京オリンピックでは、女子レスリング・フリースタイル６８Ｋｇ級で、ブレッシング・オボルドゥドゥ選手が銀メダルを獲得した他、合計１２個のメダルを獲得した。

ナイジェリアの文化･風俗

多様な民族性

民族によって帽子の形が異なり、正装する場面で多く見られる。

民族や家族の証、時には美の象徴として顔に印を刻むという施術が存在しており、イフェで発掘された１４世紀頃の青銅製の彫像の顔に線が描かれていたころから、古くから同習慣が存在していたと考えられている。衛生上の懸念や西洋文化の流入により、現在は廃れつつある。

オバサンジョ元大統領
（ヨルバ族）

ブハリ大統領
（フラニ族）

顔に印のある女性

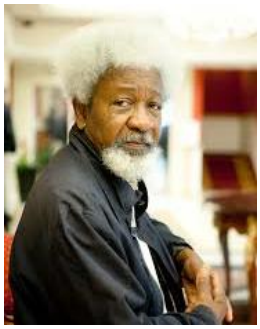
世界三大映画産業の一角ノリウッド

ナイジェリア最大の商業都市ラゴスを中心に大量に映画が制作されており、米のハリウッド映画、印のボリウッド映画と並んで、ナイジェリアのＮをとって「ノリウッド映画」と称されている。年間映画製作本数は２，０００本以上とも言われている。映画の内容は、成功物語や恋愛もの、家族の絆から伝統的呪術など日常生活に根ざすものがほとんどである。映画館での上映ではなく、ＤＶＤなどを家庭で鑑賞するスタイルが浸透しているところに特徴があり、最近では Netflix や Amazon Prime 等オンライン配信を通じて、「ノリウッド映画」は国内のみならずアフリカ諸国、欧米のアフリカ人コミュニティなどにおいても人気を博している。

スタートアップ集積地「ヤバコンバレー」

ラゴスには、シリコンバレー帰りのナイジェリア起業家等が集まるヤバ（Yaba）地区があり、ヤバコンバレーと呼ばれている。州政府が２７km の光ファイバーを敷設しインターネット環境を整備し、起業家が次々と集まるようになった。２０１８年５月には米グーグルとフェイスブックがそろって進出。急成長する IT 業界の中心地となっている。

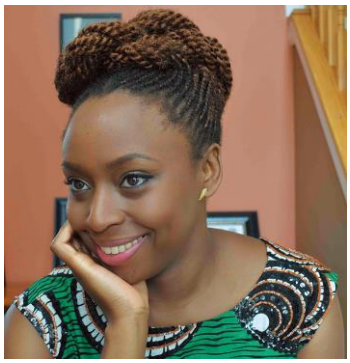
世界で活躍するナイジェリア人



フェラ・クティ　ウォーレン・ショインカ

伝統的アフリカ音楽にジャズ、レゲエ、ソウルを取り入れた「アフロ・ビート」の創始者として世界的に有名なミュージシャン・フェラ・クティ（故人）、国連事務次長や国連事務総長特別顧問を務めたイブラヒム・ガンバリ氏（現大統領首席補佐官）、世銀の副総裁を務めたオコンジョ＝イウェアラ女史（次期ＷＴＯ事務局長候補）、国連副事務総長を務めるアミーナ・モハメド女史、国際刑事裁判所のエボ・オスジ所長などが有名。

また、アフリカ出身では初のノーベル文学賞を受賞した作家ウォーレ・ショインカや、アフリカ文学の父と呼ばれるチヌア・アチェベ（故人）、「半分のぼった黄色い太陽」や「アメリカーナ」などが有名なイボ族出身のチママンダ・アディーチェなど、文学でも国際的に活躍するナイジェリア人は多い。



チママンダ・アディーチェ

女性の社会進出

(株)カネカ主催 Miss Kanekalon

英の会計事務所グラントソントン・インターナショナルが中堅企業の主に部長職以上の女性幹部の割合を調査したところ、ナイジェリアは３８％と世界５位。経営幹部に一人も女性がいない中堅企業の割合は、１％で最も少なかった。

国際機関においても、ンゴジ・オコンジョ＝イウェアラ世界貿易機構(WTO) 事務局長やアミナ・モハメド国連副事務総長といったナイジェリア人女性の活躍が著しい。

女性の社会進出を受け、ナイジェリアでは女性をターゲットとする市場が活発。特にヘアアレンジへの関心が高く、カラフルな布や、つけ毛、ウィッグなど、自身のヘアスタイルを手軽に変化させることが流行っている。都市部では若い女性の半分以上がつけ毛を編んでいるという報告もあり、現地でヘアビューティーコンテストを主催する日本企業も出てきている。

料理

パウンデッド・ヤムと
エグシスープ

コメ、茹でたヤムイモを団子状にした「パウンデッド・ヤム」、「エバ」（キャッサバから作った餅状の「ガリ」に熱湯を注いだもの）などを主食として、オクラや「ペペ」と呼ばれる唐辛子、瓜の一種「エグシ」の種子を磨り潰したものなどを使ったスープを合わせて食べるのが典型的である。

「ダワダワ」や「イル」と呼ばれる豆を発酵させた納豆に似た食べ物があり、調味料として使用される。日本企業（味の素）が同発酵豆を使用した調味料「DeliDawa」をナイジェリアにて発売している。

DeliDawa

日本ブランド（川商フーズ）のサバのトマト煮缶詰「GEISHA」が人気。シチューやソースとして使われる。２０１９年、日本のサバの輸出先第１位はナイジェリア。

日本との関係

日・ナイジェリア外交樹立 60 周年

日本は１９６０年１０月にナイジェリアを国家承認し、同年１２月には大使館を当時の首都ラゴスに開設した。その後、アブジャへの首都移転に伴い、大使館をアブジャへ移転した。２０２０年は日・ナイジェリア外交関係樹立６０周年。

首都アブジャは日本人建築家がデザイン

近代的なアブジャの町並み

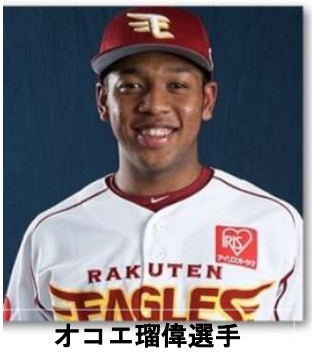
１９９１年に正式にナイジェリアの首都となったアブジャは、民族のバランスをとるために意図的に国土のほぼ中央に人工的に作られた街である。同アブジャの市街地中心部分のマスター・プランは、日本人の建築家・丹下健三氏によってデザインされた。

日本で財布を拾って警察に届けたナイジェリア人学生が一躍有名に

イケンナ・ウェケさん

２０２０年６月、筑波大学留学中のイケンナ・ウェケさんが、茨城県内のバスターミナルで拾った財布（１万円札数枚、カード等あり）を警察に届け、報労金受け取りも辞退。財布は無事に持ち主の元に戻った。７月４日、ブハリ大統領はウェケさんの行動について「誠実さや清廉さの価値を示した」と称賛する声明を発表。地元メディアで多く取り上げられ、日本のメディアでも取り上げられた。

日本でのナイジェリア人・ナイジェリア系日本人の活躍



オコエ瑠偉選手

オナイウ阿道選手

高い身体能力を誇るナイジェリア人高校生や大学生の中には、スポーツ留学生として日本の強豪校チームに加わり、全国大会等で活躍する選手も増えてきている。近年では、日本人とナイジェリア人を両親に持つ若いアスリートが、日本スポーツ界でも注目を集めることも多い。プロ野球では東北楽天ゴールデンイーグルス所属のオコエ瑠偉（るい）が有名。Ｊリーグでは横浜Ｆ・マリノス所属のオナイウ阿道（あど）が活躍し、２０１９年１１月にはサッカー日本代表に初めて選出された。バスケットボールでは、オコエ桃仁花（もにか）が東京五輪に女子日本代表として出場した。

芸能界では、ナイジェリア人の父と日本人の母を持つ関口メンディー（「ＥＸＩＬＥ」メンバー）や、コメディアンとして人気のボビー・オロゴンが有名。

（了）